

広報 NASUKARASUYAMA

那須烏山

行財政改革アクションプラン	2
消防防災会設立	6
希望を胸に入学式	9
A B C / R 運動	11
こども館に遊びにおいで!	13
まちの話題	16
インフォメーション	18
J R 烏山線90周年記念「駅ハイ」	20

— No.92 —

2013
May

5

Public Relations Magazine
of Nasukarasuyama City



やまどん ここなす姫 からすまる



できたよ! こいのぼり(4月22日、こいのぼりづくり)

市民の目線に立ち、市民に開かれた無駄のない行政を目指し

那須烏山市

行財政改革アクションプラン

総合計画後期基本計画が4月にスタートし、市では、計画的な行政運営に取り組んでいます。しかし、長期化する景気低迷や少子高齢化等により、厳しい財政状況が続いており、事業の推進にあたっては、効率的・効果的な運営が必要となります。

先月号では、後期基本計画の重点施策である5つの「チャレンジプロジェクト」を中心に紹介しましたので、今月号では、同計画の「行政経営編」に位置付けられる「行財政改革アクションプラン」を中心に、本市の行政改革の進め方などを紹介します。

総合計画では、まちづくりの基本理念に「みんなの知恵と協働（きょうどう）によるひかり輝くまちづくり」を掲げています。これは、厳しい財政状況を直視し、本市の身の丈をしっかりと把握しながら、行財政面での自立や、豊かな自然・歴史の継承、子どもたちが夢や誇りの持てるまちづくりに市民と行政が知恵を出し合って、取り組んでいこうというものです。

本市における行財政改革では、これまで、平成17年度に国の新地方

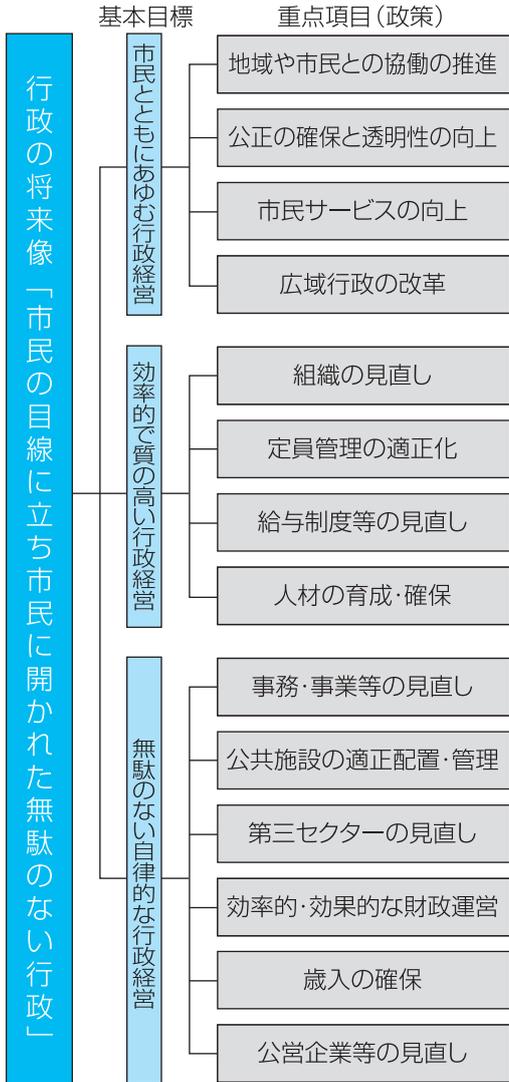
革指針に基づく「行財政集中改革プラン」〔平成17～21年度を策定し、職員数の削減などに取り組んできました。また、平成20年度から10年間の総合計画「ひかり輝くまちづくりプラン」の中に、行政経営編を設定し、行財政改革大綱として位置付けてきました。後期基本計画では、総合計画と個別計画の整合性を図りながら、その後の進行管理を効率的・効果的に実施するため、さらに、行政経営編と行財政改革アクションプランを一元化

することになりました（3ページ下図参照）。同プランの計画期間は、後期基本計画と連携して取り組むため、平成25年度から29年度の5年間としています。なお、行財政改革を進めるにあたり、本市の背景は次のとおりです。

①少子高齢化による人口減少の加速

本市の人口は、平成17年国勢調査時には、3万1150人であったものの、社会経済環境等の影響により、

行財政改革アクションプランの体系



減少に歯止めがかからず、平成22年国勢調査では2万9206人と、5年間で約2千人の減少となつていす。特に年少人口（0～14歳と生産年齢人口（15～64歳）が減少し、老年人口（65歳以上）は増加傾向で、典型的な少子高齢化現象が進行しています。

② 厳しい財政状況

日本経済は、東日本大震災による復興需要などの影響で緩やかに回復してきましたが、世界経済の減速等により、地方公共団体の行財政を取り巻く環境は、依然、不透明です。

本市では、市税収入が伸び悩み、地方交付税、臨時財政対策債、国・県補助金の縮減・廃止等により、歳入の確保が厳しい状況にあります。一方で、

合併特例債による市債の償還金や福祉に関する経費、さらに広域行政事務組合への負担金などの増加が予想されます。

③ 地方分権への対応

地方分権改革の推進により、国県の権限や財源が、住民に身近な自治体に移譲されています。そのため地方自治体では、新たな事務を行うこととなります。また、職員数を抑制する一方で、事務量が增加することから、これまで以上に職員の質の向上、事務事業の見直しが必要となります。

14の重点項目

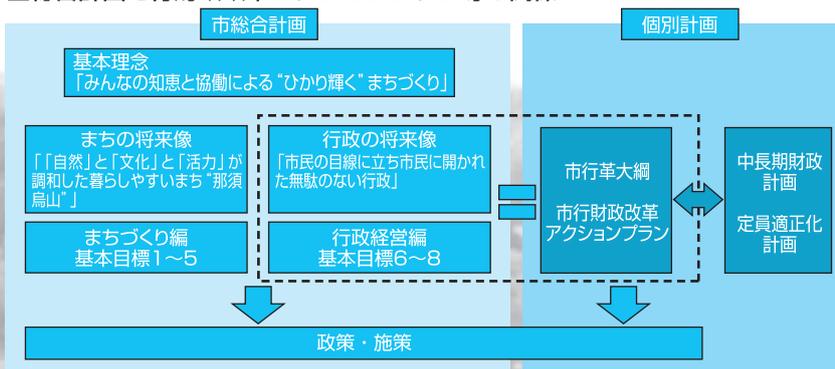
行財政改革アクションプランでは、「市民の目線に立ち、市民に開かれた

無駄のない行政」を将来像とし、3つの基本目標に対して、14の重点項目（4・5ページ参照）を掲げ、行革に取り組んでいきます。

職員の定員適正化

行財政改革の柱となるのが、職員の定員管理です。市では、これまで、定員適正化計画を策定し、削減に取

総合計画と行財政改革アクションプラン等の関係



り組んできました。行財政合理化の観点から、より一層の人員削減などが求められているなか、これまで、目標を上回る削減を達成しています。合併時に336人だった職員数は、平成24年度当初には268人、25年度当初には258人と、23.2%の削減となっております。このほど策定した平成24年度から10年間の定員適正化計画では、平成29年度には245人、最終年度の33年度には239人以下を目標としています。

市制施行や権限移譲等に伴い、ますます高度化・多様化する行政運営に対応するため、事務事業の効率化や組織の見直し、人材育成などが必要となります。計画では、定員適正化の方法として、①職員採用の抑制②事務事業の見直し③民間委託等の推進④組織機構の改善⑤人材育成⑥多様な職員雇用の活用⑦スクラップ・アンド・ビルド(※)の徹底、の7つを掲げています。

市では、このほかにも定員管理計画や人材育成基本方針を策定し、最少の人員で最大の効果をあげることを目指しています。

財政収支の見通し

市では、一般会計の今後10年間の財政収支を見通した「中期財政計画」を策定しました。本計画は、歳入の予測及び総合計画後期基本計画と

1 市民とともにあゆむ行政経営

今後の行政経営では、今まで以上に行政と市民の協働によるまちづくりが重視されます。多様化・複雑化した公共サービスを安定的に運営するためにも、市民・市民団体・企業による「新たな公共」を確立していく必要があります。また、行政は市民に対し積極的に情報提供し、政策・計画立案時からの市民参加を促すなど協働によるまちづくりを推進します。

市民参加による評価の実施や事務事業に関する優先順位の明確化、無駄の排除を推進します。

【重点項目】

① 地域や市民との協働の推進

市民参加を進めるため、市民の意見を引き出せるような広報に努めるとともに、情報の積極的な発信、意見を反映させる仕組みづくり、「自治基本条例制定を検討します。まちづくり団体の支援方法の検討や自治会等の地域コミュニティの活性化を促進します。

② 公正の確保と透明性の向上

様々な媒体を活用した行政情報の適切な周知、広報紙作成の効率化や質の向上等に努めます。行政手続きの明確化に向け、審査基準の積極的な公表や手続きの簡素化等に努めます。積極的な情報の公開に努めるとともに、空き施設を活用した集中管理書庫の確保、文書管理システムの充実を図ります。監査体制の充実・強化、法改正に伴う監査委員の権限強化への対応等に努めます。

③ 市民サービスの向上

窓口等サービスの向上を見据えた組織体制の確立、職員の資質向上に努めます。各種証明書発行や公共料金支払い等は、コンビニエンスストアを活用するなど充実を図ります。行政サービス評価の実施・公表を行うため、評価システムの導入に向けた調査・研究を進めます。

④ 広域行政の改革

広域行政事務組合にプロジェクトチームを設置し、組合施設のあり方や行財政改革推進計画における課題を検討します。広域消防の2署体制に向けた再編、那須南病院の黒字化や人材確保に努めます。

2 効率的で質の高い行政経営

今後の庁舎方式のあり方や組織機構を再度検討するとともに、職員の大規模退職を見据え、「定員適正化計画」に基づく計画的な定員管理が必

要です。今後の財政状況から、少数精鋭によるスリムな行政組織への転換を推進します。

職員の政策形成能力等を高める研



連携した歳出の見直しを示したものです。計画期間は、平成25年度から34年度までの10年間。歳入・歳出の推計には、新市誕生後の「地方財政状況調査表」や平成24・25年度の当初予算等を参考にしています。

歳入では、普通交付税の有利な算定が平成27年度で終わるため、28年度から段階的に縮減されていきます。歳出では、震災復興を優先させた施設整備のほか、公共施設の統廃合、庁舎耐震化への対応など緊急性の高い事業を優先。公債費は、既存の元利償還金や新たな起債の償還金を適正に管理していきます。

各課の連携で 財政健全化を目指す

これらの計画推進にあたっては、各課が連携し全庁体制で取り組むとともに、市民の皆さんと一緒に「ひかり輝くまちづくり」を進めていきます。

総合計画や行財政改革アクションプラン等に関し、詳しくは市ホームページをご覧ください。総合政策課 ☎0287-83-1112までお問い合わせください。

(※1)目的を達成した事務事業等を廃止し、新たな行政需要に取り組んでいく。

(※2)Information and Communication Technology(情報通信技術)の略。

修の充実、複雑・多様化する行政ニーズに対応できる人材の確保、職員の実績・成果等を適切に評価・反映できる人事評価システムの充実を推進します。

【重点項目】

①組織の見直し

今後の経済情勢や県有施設の再編動向を踏まえ、防災の観点も含めた庁舎方式のあり方を検討します。スリムな組織再編を進め、行政サービスに支障が生じないように指定管理者制度の積極的な運用や民間との協働に努めます。

②定員管理の適正化

組織の再編に即した定員適正化計画を見直し、専門職の確保、人材育成を図るための配置管理の確立、嘱託職員等の適正管理を進めます。

③給与制度等の見直し

人事評価システムの確立、給与水準や福利厚生事業の適正化などに努めます。

④人材の育成・確保

研修制度の充実、接遇の向上を含む職場内研修を実施します。専門職員は、外部採用や県との人事交流による育成を図ります。人物重視の職員採用により、人材育成にも努めます。

3 無駄のない自律的な行政経営

今後も厳しい財政運営が見込まれるため、本市独自の行政評価システムを確立・活用し、費用対効果の高い事務事業を展開します。また、ICT(※2)の活用による行政事務の簡素化・効率化や、市税等の徴収率向上に向けた体制の整備により、持続可能な財政基盤の確立を推進します。

公共施設の適正な管理・運営、未利用・低利用な公共施設のあり方を再検討し、売却や貸付等を視野に入れた計画を策定していきます。

【重点項目】

①事務・事業等の見直し

政策の評価や改善等の仕組みづくりに向けた調査・研究を進め、市民目線でのチェック機能も検討します。窓口業務のオンライン化、電子自治体に向けた取り組みを検討するとともに、災害時における電子情報の安全確保を図ります。適切な外部委託の推進、公平公正な補助制度の見直しを行います。公共事業のコスト削減をすることにも、効果測定の体制や手法を検討します。

②公共施設の適正配置・管理

各種検討委員会等による協議を行い、公共施設整備方針を策定します。公共施設の指定管理者制度による効率的な運営に努めます。

③第三セクターの見直し

市農業公社は、出資者との協議に基づく一般財団法人への移行を進めるとともに、第三者による監査体制の継続に努めます。

④効率的・効果的な財政運営

「中長期財政計画」を毎年見直し、計画的な財政運営を推進します。

⑤歳入の確保

口座振替やコンビニ収納の拡大、個人市民税の特別徴収(給与天引き)への移行を進めるとともに、県との連携による大口滞納者への対応を検討します。人件費・物件費の削減や起債発行の抑制に努め、広告掲載事業やふるさと応援寄付金事業を継続します。市所有の未利用地処分等を検討し、公共施設の跡地利用については、地元自治会等の意向を踏まえ、企業誘致や太陽光発電事業用地としての活用を視野に検討を進めます。

⑥公営企業等の見直し

上水道事業と簡易水道事業の会計統合等による業務の効率化を図ります。漏水修繕を継続して有収率向上に努めることにも、収納対策の強化に取り組みます。

那須烏山市消防防災会設立

過去の災害対応で先頭になって取り組んだ経験を生かし、今後の地域防災対策に役立てようと、消防団員や消防署員、市職員、OBなどによる「那須烏山市消防防災会」が設立されました。同防災会は、有志9人が発起人となり準備を進め、県内で初めての結成となります。

4月14日(日)には、烏山公民館で設立総会が開かれ、関係者60人が参加しました。総会では、発起人を代表して消防団OBの大橋光一さん(宮原)が、「OBが大



上:防災会設立の趣旨を説明する大橋さん/下:クイズなども行われた林さんの講演会。

勢いがあるので、関係機関と連携して地域防災に貢献していきたい。

現役の方々も、退職後には協力してほしい」と、設立の趣旨を説明。大谷範雄市長は、「専門家の知識を生かし、地域防災の向上に協力してほしい」と、あいさつを述べました。続いて会則や事業計画、役員体制などが協議され、会長には、発起人代表の大橋さんが選任されました。

当日は、NPO法人栃木県防災士会理事の林洋克さんによる「身近でできる防災対策」と題し

た講演も行われました。林さんは、これまでに発生した大規模な震災などを踏まえ、災害発生時の安全な避難方法などを解説。

「自分自身が助かること」「隣近所との連携」の大切さなどを参加者に訴えました。一昨年の東日本大震災で大きな被害を受けた本市では、災害に強いまちづくりが重要な課題となっています。しかし、1月に市内全自治会を対象に実施した「地域防災に関するアンケート調査」では、102自治会中、

7割以上の自治会が「自主防災組織」の必要性を感じながらも、結成されているのはわずか8自治会(結成率8%)という結果でした。

た。消防防災会では、自主防災組織の結成や活動を支援するほか、災害発生時の初期対応、平常時の防災意識啓発、自助・共助活動の訓練等にも取り組みます。

なお、同会では、随時会員を募集しています。詳しくは、大橋会長 ☎090-3245-159 22までお問い合わせください。

半年で587人が登録

「デマンド交通」試験運行

市は、「デマンド交通」の試験運行を南那須地区で昨年10月に開始し、4月以降も継続しています。運行開始から6か月経過した3月末現在の登録者数は587人で、このうち、実際の利用者は110人(18.7%)です。

この「デマンド交通」とは、事前に登録をし、予約をして利用する公共の乗合交通です。3月の利用状況は、利用人数が延べ381人で1日平均19.1人でした。利用場所(乗車・降車を)見ると、自宅、那須南病院、スーパー、大金駅等の順となっています。利用者の年代別構成

比は、85〜89歳が26.9%、75〜79歳が25.1%、70〜74歳が16.0%と続き、65歳以上が91.3%を占めています。1人当たりの利用回数は、最多で34回、10〜20回の利用が8人でした。

市では、試験運行を開始してから定期的に、運行事業者や予約センターと課題の整理、解決策の検討等を行っています。この中で、便数の増加や運行区域の拡大などが、本稼働に向けた課題として挙げられています。

さらに、3月には「デマンド交通ニュース」を初めて発行し、登録はしていますが、まだ利用して

春の交通安全県民総ぐるみ運動

交通事故防止の徹底を図る

4月6日(土)から15日(月)までの10日間、子どもや高齢者に優しい「3S運動」の推進を重点に、春の交通安全県民総ぐるみ運動が実施され、市内でも様々な事業を展開し交通事故防止の徹底を図りました。

今回の新たな取り組みは、市

内スパー駐車場に白バイ2台を展示してのPR活動です。展示された白バイは、親子連れなどに大人気でした。

8日(月)には、山中入口交差点で特別街頭指導を実施。大谷範雄市長、大貫良之那須烏山警察署長はじめ、交通安全協会や安

全運転管理者協議会の会員など約50人が、信号待ちのドライブにチャリンを配り、安全運転などを促しました。また、運動期間中には、学校関係者も加わり、主要交差点で早朝街頭指導を実施するなどし、広く市民に事故防止を呼び掛けました。

【3S運動】SEE(発見する)、SLOW(減速する)、STOP(停止する)の頭文字をとり、子どもや高齢者を交通事故から守るため、優しい運転に心掛ける運動。



上:白バイを展示して交通安全を呼び掛ける/下:特別街頭指導で事故防止を訴える関係者。



新中学1年生に 反射タスキを寄贈

市と那須烏山交通安全協会(篠崎昌久会長)では、4月2日(火)、市教育委員会に反射タスキ250本を贈りました。

当日は、篠崎会長が大谷範雄市長とともに「バス通学から自転車通学へ変わる子どもが多いので、ぜひ有効に活用してください」と、池澤進教育長に反射タスキを手渡しました。

市教育委員会では、各中学校を通じて、新1年生全員にこのタスキを配付し、交通事故防止と交通安全の意識向上を図ります。



反射タスキを手渡す篠崎会長(中央)。

いない人への利用促進などを図っています。

デマンド交通に関して、詳しくは総務課危機管理室 ☎0287-8311111 までお問い合わせください。

【概要】

○運行(大金タクシー)

・月～金曜(祝日、年末年始は除く)
・午前7時30分～午後4時30分
(1時間単位で9便)

○運行区域

・南那須地区全域及び烏山地区
指定施設(烏山庁舎・那須南病院)

○登録

市役所や予約センター、運行事業者の窓口にある登録申込用紙に記入して提出

課題解決に向け定期的に検討。



○予約センター(さすな運営センター)
☎0287-8218252

・受付・月～金曜(祝日、年末年始は除く)の午前8時～午後5時

「ホーム陽だまり」開所

社会福祉法人大和久福祉会塩野栄司理事長では、3月1日(金)から三箇地区に障がい者の生活の場として、共同生活介護・共同生活援助事業所「ホーム陽だまり」を開所しました。4月14日(日)には、同所で開所式が開かれ、関係者や招待客、利用者など65人が参加し、ホームの開所を祝いました。

このホームは、同会の理事長でもある塩野さんが個人で建設し、同会が運営するものです。木造平屋建てで、A棟・B棟の2棟からなり、合計延べ床面積は339.07㎡、定員は16人で、現在12人が利用し

ています。建物内部は、障がい者の高齢化にも対応できるようバリアフリーで廊下も広く、洗面台でお湯が使えるなど、快適な空間となっています。

開所式では、塩野理事長が、「地元や関係者の理解と協力で、大和久福祉会で7番目となるホームを開所することができた。このホームが、障がい者のみならず、地域福祉の交流拠点となることを期待する」とあいさつ。来賓や保護者会長、利用者代表があいさつを述べたあと、参加者は建物内部を見学し、最後に乾杯で祝いました。



上:開所を祝い乾杯/下:バリアフリーで広い廊下の建物内部。



英霊に献花する戦没者の遺族。(上:南那須地区/下:烏山地区)

恒久平和を祈念し 2地区で戦没者追悼式

日清・日露の戦争から第二次世界大戦までの戦火で、尊い命を落とされた戦没者を追悼するとともに、平和を祈念するための戦没者追悼式が、南那須地区と烏山地区でそれぞれ行われました。

南那須地区では、4月13日(土)、南那須地区戦没者追悼式執行委員会(鈴木定男委員長)が、南那須公民館で式典を開催。遺族や来賓など約150人が参加して、598柱の英霊を追悼しました。

また、烏山地区では15日(月)、烏山彰徳会(小森和昌会長)が、烏山体育館で式典を行い、約300人が参

加して963柱の英霊を追悼しました。

それぞれの追悼式では、黙とうや主催者の式辞に続いて、大谷範雄市長や中山五男市議会議長などが追悼のことは述べました。最後に参加者全員が、一人ひとり白菊を献花して英霊を慰め、式典の幕が閉じられました。

今も世界のどこかで、戦争により命を落としている人がいます。命の大切さをあらためて認識し、世界から戦火がなくなることを願いたいものです。

希望を胸に新たな学び舎で

春本番を迎えた4月、市内の小・中学校では、相次いで入学式が行われ、期待と不安を胸に新入生が校門をくぐりました。8日(月)には中学校3校で225人、9日(火)には小学校3校で223人が入学(学校別は下表のとおり)し、新たな学び舎での生活をスタートさせました。

七合小学校では、38人の新入生を迎え、今年1月に新築した体育館で式が行われました。同校では、これまで各学年1クラスでしたが、

今年の1年生は、2クラスでのスタートとなりました。

幼稚園・保育園でも入園式が行われ、初々しい園児たちが、お兄さんお姉さんの仲間入りをし、園内には、園児たちの元気な声が響きわたりました。



上から、新入生代表の誓いのことば(下江川中)／新体育館に入場する新入生(七合小)／新入園児にプレゼント(すくすく保育園)。

■学校別入学者数 (単位：人)

学校名	入学者
江川小	28
荒川小	58
境小	13
烏山小	86
七合小	38
小学校計	223
下江川中	29
荒川中	48
烏山中	148
中学校計	225

入学式

B&G体験クルーズ

小笠原で大冒険

公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド(略称B&G)財団では、洋上での生活を通して、海や船、自然などを学んでもらおうと、平成24年度海洋教育事業「体験クルーズ」を小笠原で開催しました。

本市から、小学生3人が参加し、3月25日(月)から30日(土)までの5泊6日の日程で、500人の仲間とともに研修や様々な活動を通して、海や自然の素晴らしさ、海と人とのかわりなどを学んできました。ここでは、3人の貴重な体験を、本人の感想文を一部抜粋して紹介します。



柳澤くん。

B&G体験クルーズに行つて

荒川小 柳澤希実

ぼくは、初めて一人で船に乗るため、とても緊張しました。でも、すぐに友達ができ、緊張も無くなりました。結団式が終わると、晴海ふ頭を出港し旅の始まりです。

初日に海やアホウドリ、小笠原の自然の大切さを学ぶことができ、今回の大きな目的を達成することができました。テーブルマナーは、人生初の体験でした。

小笠原での寄港活動では、シュノーケリングをりましたが、運が悪く、魚が一匹も見られず残念でした。夕食のときには、小笠原のメンバーが、南洋踊りを披露。そのときの音楽は、沖縄と日本の音楽を混ぜたようなとても良いメロディでした。ホエールウォッチングやウミガメ学習なども行い、一生の思い出になりました。

ワークシヨップでは、組ごとに漢字を発表。僕たちの組は「人」の下に「然」と書き「よるこび」と読む字を作りました。最終日の解団式では、友達になったみんなと別れ

るのがさみしかったです。

このような機会があれば、また参加したいです。そして、大人になつたら、植えた記念樹の成長を見るために、また父島に行きたいと思います。



荒井さん(中央)。

5泊6日の思い出

七合小 荒井永環

これから長い旅になると思うと、家族との別れがさみしく、不安でいっぱいでした。でも、夜のパーティーで新しい友達ができ、みんなやさしい人なので安心しました。組別の自己紹介では、みんなの

ことが良く分かりました。楽しみにしていたレクリエーションでは、「命令ゲーム」や「柔道ダンス」をしました。海洋観察では、名前のイメージと違い、「アホウドリ」の飛

ぶ早さにびっくりしました。

寄港活動では、シュノーケリングが一番楽しかったです。小船に乗ってのホエールウォッチング、ウミガメの学習などもしました。小笠原の人たちは、みんないい人ばかりでした。

ワークシヨップで、私たちの組が考えた漢字は「笑緒」で、「ワツシヨイ」と読みます。発表会では、「ふじ丸賞」というすばらしい賞をもらいました。

最終日は、さみしい気持ちでいっぱいでした。みんなと別れてしまふと思うと、この旅が、短いものだったと思えました。

このクルーズで学んだことを生かし、「やるときはやる」「楽しむときは楽しむ」とけじめをつけていきたいです。

さよなら「ふじ丸」

鳥山小 中畝望愛

「ふじ丸」が引退するため、今回がラストクルーズとなり、とてもさびしいです。

晴海ふ頭を出航し、船はレインボブリッジの下を通りました。めつたにないことなので、うれしかったです。操舵室にはいろいろな機械があり、船長になった気分でした。海洋観察では、絶滅したと考えられていたアホウドリに会えました。将来、獣医になりたいので、詳しくなりうれしいです。

小笠原に着き、3月11日には、ここにも津波が来たと聞いて、海はつながっているのだと改めて思いました。レクリエーションでは、リーダーになりましたが、みんなが励ましてくれてよかったです。

私たちの組の漢字は、「欠片」と書いて「ピース」と読みました。お別れパーティーでは、被災地の14人の友達にメッセージ入りのTシャツをプレゼントし、復興を応援しました。最後の夜は、みんなとの別れがつかなくて、なかなか眠れませんでした。

この体験クルーズで、小笠原の自然に触れたり、全国に友達が増えたりして、とても楽しかったです。そして「ふじ丸」、36年間ありがとうございました。



中畝さん。